

# 知的障害特別支援学校における余暇の授業実践<sup>†</sup>

山田有輝也\*・前原 和明\*\*

秋田大学大学院教育学研究科（大学院生）\*・秋田大学大学院教育学研究科\*\*

特別支援学校において、余暇教育に関する支援や教育が行われているが、卒業後の職業生活への移行を焦点においた余暇教育は十分に行われていない。本研究では、雇用への移行を目指す知的障害特別支援学校高等部の生徒を対象として、余暇の重要性を教授する実践を行った。授業実践では主に現在の余暇の過ごし方を振り返り、「余暇の重要性の認識」と「余暇を行うために必要な力」について考える活動を行った。授業後の生徒のリフレクションには、「日々の仕事に否定的な影響が出ないように、余暇を楽しみ、心をリラックスできるようになりたい」「働き出してから仕事と余暇のバランスを考えて生活していく」といったことが書かれていた。学校卒業後の職業生活に移行していくための余暇の支援について、さらなる研究や実践を行っていくことが必要であると考えられた。

**キーワード：**職業生活、特別支援学校、知的障害、余暇、一般就労

## I はじめに

文部科学省の「特別支援教育資料」（文部科学省、2021a）では、特別支援学校生徒の34.4%が卒業後に就職へと移行している。現在の障害者の雇用促進の社会情勢を考慮すると、特別支援学校における一般就労への移行に向けた指導は一層重要となっていくと考えられる。

移行というと、あるステップから次のステップへと階段のステップをのぼるようなイメージを持つ。しかし実際は、職業生活の移行に付随する様々な活動を含むプロセスとして捉えられる（Tooman, M.L., Grant Revell Jr, W. & Melia, R.P., 1988）。このように、移行は、動的なプロセスである（Trach, J.S., Oertle, K.M. & Plotner, A.J., 2014）。また、移行支援は、その対象となる人の生涯に渡る発達を支えるものと捉えることができる（Szymanski, E.M., 1994）。

この特別支援教育から社会への移行支援において、移行支援に携わる支援者間の連携が不可欠である（八重田・柴田・梅永, 2000）。内海（2004）は、特別支

援学校における移行支援を充実させるために、「生徒の移行支援計画の策定への主体参加」と「移行支援計画を実行していくための仕組み及び環境整備」の必要性を報告している。吉田ら（2008）は、社会への移行に際して、職業リハビリテーション機関との連携の必要性を指摘している。このような移行支援における連携を考えると、特別支援教育から社会への移行支援においては、両領域がオーバーラップして重なりあいながら支援を提供していくイメージの支援が有効になると考えられる。その一方で、特別支援学校の職業リハビリテーション機関と移行支援の内容は、「職場開拓への協力」や「進路指導・職業教育に関する助言」に限られているという現状もある（国立特別支援教育研究所, 2012）。

卒業後の職場への定着に向けて支援を行う支援者からは、職業生活の安定に向けては、余暇支援などの生活の安定によって、働くことが継続できるようにすることも重要との指摘もある（根本, 2020）。実際、卒業後の支援を担う福祉機関や職業リハビリテーションを提供する労働機関においては、「職業準備性」（松為, 2006・2020）として、社会参加に際して、十全な職務遂行をするために、この職務遂行を支える労働習慣（あいさつ、返事、報告、連絡、相談、身だしなみ、規則の遵守、一定時間仕事に耐える体力など）、対人技能（感情コントロール、注意されたときの謝罪、苦手な人へのあいさつなど）、日常生活（基本的な生活リズム

2024年1月10日受理

<sup>†</sup>Yukiya YAMADA\* and Kazuaki MAEBARA\*\*, Leisure Education in Special Needs Schools for Students with Intellectual Disabilities

\*Graduate School of Education, Akita University (Graduate Student)

\*\*Graduate School of Education, Akita University

ム、金銭管理、余暇の過ごし方、移動能力など)、健康管理(食事栄養管理、体調管理、服薬管理など)といった生活に係る技能(ライフスキル)の獲得あるいは配慮検討といった支援が不可欠との前提に立った支援が行われている。

このように、特別支援教育では、卒業後のキャリア発達を考慮した取組みを行うことが現実問題として重要となり、円滑な社会への移行に向けた支援が行われることが大切である。特に、余暇活動は、先に述べた職業準備性のライフスキルの一部ではなく、ライフスキルの維持、活用の全般に大きく関連する活動であり、余暇を中心とした職業生活に関連する指導が特別支援教育の中で行われることが重要であろう。

学校在学時の余暇に関する取組みについて、「平成30年度 特別支援学校学習指導要領解説総則編」(文部科学省, 2018)では、「単に生活のみが保障され、仕事により賃金を得て、社会における役割を果たしていくのみならず、学習、文化、スポーツといった生涯にわたる学習や体験の中から生き甲斐を見つけ、人とつながっていくことが必要」と書かれている。また、「障害のある子供の教育支援の手引き」(文部科学省, 2021b)では、知的障害者の適応行動の困難さが挙げられ、このために「余暇利用などについて、その年齢段階に標準的に要求されるまで至っていない」と記されている。また、在学時の余暇指導は、「友だち同士での外出を促すこと」、「本人の楽しみをつくること」、「本人の居場所をつくること」、「活動するための情報の提供」の4つの役割があるとされている(安田・丸山, 2021)。このように、学校在学時から就職後を見越した余暇指導を行うことは重要であろう。

これまで、特別支援学校において余暇指導は、関心をもって取り組まれている状況がある。伊藤ら(2007)は、全国調査から教科学習の中に、音楽や体育が取り入れられ、余暇活動につなげる観点を持った教科学習が展開されている状況を報告している。また、実践報告として、村上(2021)は、特別支援学校高等部2年生を対象として、家庭でできる余暇を増やすこと、他

者の余暇について興味を持ち、他者と過ごす時間の心地よさを感じるなどのことを目指した授業実践を行っている。このように、余暇指導に対する関心の高まりから余暇を意識した実践が取り組まれている一方で、その内容について、一般就労への移行に焦点をあてているとは言い難い(山田・前原, 2023)。卒業後は、一般就労へ移行し、職業リハビリテーション機関や福祉機関を中心とした支援に移行するにも関わらず、この関係機関への移行を考慮した在学中の指導が十分には行われていないと考えられる。

そこで、本研究では、特別支援学校卒業後の一般就労への移行を焦点に置いた学校在学時における余暇指導の試行的実践について報告をする。

## II 方法

### 1. 実践の視点

本実践の視点は、「職業生活との結びつきを考えた余暇の過ごし方を考えること」である。この目的に基づき、授業内では、学校卒業後の余暇の過ごし方について生徒に考えることを促した。この活動を通じて、生徒が余暇の重要性について知り、そのために必要な事柄について意識を向けることを目指した。

### 2. 実践対象者、場所及び日時

A県にあるB知的障害特別支援学校高等部教室にて、A知的障害特別支援学校2年生徒11名(男性7名、女性4名)を対象とした。主に対象とした生徒は、卒業後の一般就労を目指す生徒である。

2023年12月15日10時30分から12時20分の「職業・家庭科」の授業2時間分において授業実践を行った。

### 3. データ収集の方法

(1) 生徒の振り返りシート及び授業内のワークシート生徒が授業中に記述したワークシート並びに、授業の終末に記述した振り返りシートを用いる。

(2) 教員へのアンケート

授業を参観した教員4名に本実践並びに余暇の授業実践に関するアンケートを実施した。アンケートの項目として、「授業実践の成果と課題」、「余暇の授業を

表1 全体計画

	本時のねらい	学習内容
1時間目	自らの余暇の過ごし方をもとに、学校卒業後の「余暇」の意味について考え、記述することができる。	自分の行っている余暇を記述し、これらの余暇が、どのような意味を持っているのか考え、表現する。
2時間目	現在の余暇を基に、卒業後にやってみたいことを考え、そのために必要なことについて表現することができる。	現在行っている余暇を基に、将来の余暇について考え、卒業後に楽しむためにはどのようにしたらよいのかについて表現する。

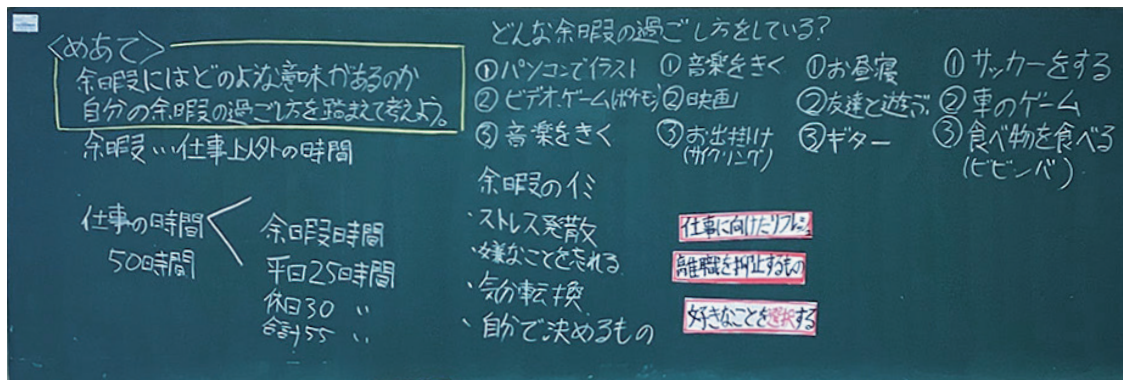


図1 1時間目の板書

行うにあたっての工夫や考え」の2点を設定した。

#### 4. 手続き

実践対象者は、A特別支援学校卒業後に一般就労を目指すクラスで学習に取り組んでいる。本実践では、表1の全体計画に基づく授業実践を行った。

#### 5. 倫理的配慮

A特別支援学校の管理職に承諾を得て実施した。授業開始前にも個人が特定されないよう使わせていただくことを口頭で説明した。

### Ⅲ 結果及び考察

#### 1. 実践の実際

##### (1) 1時間目の授業実践

1時間目の授業では導入で、社会人の一日のスケジュールを提示した。今回の授業では、睡眠時間を除く他の自由に使える時間を「余暇」とすることを伝え、スケジュール表を見て、計算をし、余暇時間が仕事をしている時間よりも多いことを確認した。

その後、現在行っている学校以外の時間の余暇の過ごし方について共有をした。数名の生徒のよく行う余暇の過ごし方トップ3を発表してもらい、全体で共有した。

余暇を過ごす意味について質問をしたところ、「ストレス発散」、「自ら選択をしていくもの」、「いやなことを忘れる」、「気分転換」といった回答が見られた。

##### (2) 2時間目の授業実践

本時では、前時に記述した現在行っている余暇を卒業後に継続させるためには、どのような力や資源が必要かについて考え、発表する授業を展開した。さらに、卒業後に挑戦してみたい余暇についても考える機会を設けた。

生徒の中には、お金を稼ぐことができるようになり、自由に使えるお金が増えることから「旅行をしたいが、計画的にお金を使いたい」といった記述が見られた。

#### 2. ワークシートの記述

(1) 生徒の振り返りシート並びにアンケートの記述  
生徒のワークシートの記述として、表2のような結果が得られた。生徒は、様々な興味・関心のある事柄を記述していた。

生徒それぞれが、様々な興味関心、余暇の過ごし方を記述していた。特に、部活動に取り組む生徒は学校卒業後も継続していきたいことが伺えた。

授業の終末での振り返りシートには、表3の回答が得られた。

##### (2) 教員へのアンケート

教員4名から回答を経た。授業の成果と課題について表4に整理した。

### Ⅳ まとめ

本授業実践の成果として、「自らの余暇について振り返り、就職後の余暇の重要性について考えるきっかけ」が考えられた。生徒の振り返りシートの記述には、「働き出してから仕事と余暇のバランスを考えて生活していく」、「日々の仕事に悪い影響が出ないように余暇を楽しみ、心をリラックスできるようにしたい」といったものが見られた。生徒自身卒業後の職業生活を見越した余暇の在り方を考えることができた。

従来、卒業後の企業からは、特別支援教育の教員の連携の中で、余暇を含む生活面の指導が在学中に必要である事例が存在している (Maebara, K., 2022)。このような状況を踏まえると、特別支援教育は、出口指導を目指した活動ではなく、その後も生涯に渡り続いていく本人の発達を支援する視点を持つ必要があるだろう。その際に、この移行を意識した支援を特別支援教育の段階から考慮することは重要である。個々の余暇内容を一方的に指導することを目指すのではなく、余暇指導の重要性を教員が認識し、これに応じて生徒も重要性を認識する。そして、それを卒業後に生徒が実践できるような指導を目指していくことが大切である。この授業では、このような一般就労を見越した視

表2 生徒の余暇に関するワークシートの自由記述の例

好きなこと、興味があること	現在の余暇の過ごし方
スニーカー	音楽を聴く
バスケット	バスケット
中古屋	スニーカー
ご飯を食べに行く	読書
推しのライブグッズ	友達と遊ぶ
小物、雑貨集め	ゲームのタスク消化
サッカー	サッカー
動画視聴	車のゲーム
好きなものを食べる	食べ物を食べる
音楽を聴く	ユーチューブを見る
温泉	スポーツ観戦
ゲーム	音楽を聴く
お菓子作り	映画
映画	ビデオ
買い物	カラオケ
ビデオを見る	買い物
プロゲーマー	ギター
動画を作る	お昼寝
メイク研究	
動物	
楽器	
空	
旅に行きたい	

表3 振り返りシートの記述

学んだこと	考えたこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 仕事する時間より余暇時間が長いこと</li> <li>・ 余暇というのは自分がこれから生きていくモチベーションを保つために必要なことなんだとよく分かった</li> <li>・ 卒業後の余暇時間について学べた</li> <li>・ 余暇時間の大切さや余暇時間の方が仕事をしている時間よりも長いと分かりました</li> <li>・ 余暇にはどのような意味があるのかということを知ることができた</li> <li>・ 余暇の時間と仕事の時間がわかった</li> <li>・ 働き始めたら自由な時間が減ってしまうので今のうちに遊んでおいた方がいいと分かった</li> <li>・ 仕事をしている時間より余暇時間の多さの違いがわかった</li> <li>・ 仕事ばかりではなく余暇も必要だと思った。次に頑張れるようになるということがよくわかった</li> <li>・ 離職を抑止するものという見方があると分かった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 趣味などに時間を使いたい</li> <li>・ 自分がやりたいことはいっぱいあるので少しずつそのやりたいことを消化していきたい</li> <li>・ 今やっている余暇も続けて、社会に出たら今やってみたい余暇もできるようにしたい</li> <li>・ 自分が後悔しないようなお金の使い方をする</li> <li>・ ストレスがたまらないようにちゃんと余暇の時間を使います</li> <li>・ 買い物したいです</li> <li>・ 仕事や学校のリフレッシュがしたい</li> <li>・ 旅行したい</li> <li>・ 学校生活に影響が出ない程度にいろいろなことをしておこうと思った</li> <li>・ 働き出してから仕事と余暇のバランスを考えて生活していく</li> <li>・ 仕事をしていく上ですべて仕事に使うものではなく、気持ちのリフレッシュだったり人との関係でも役立つと思うので余暇の時間を大切にしながら生活していきたい</li> <li>・ 余暇の時間も多かったです。もっと活躍するために計画を立てたいと思った</li> <li>・ 日々の仕事に悪い影響が出ないように余暇を楽しみ、心をリラックスできるようにになりたい</li> </ul>

表4 実践の成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・余暇の意味を考える機会になった</li> <li>・スケジュールから実際の時間を割り出して比較し、余暇活動の例を選択し、発表するといった手だてを参考にしたい</li> <li>・シンプルにまとめられていた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余暇指導で何を指導すべきかわからなかった</li> <li>・まとめを生徒の言葉でできるとよかった</li> </ul>

点を得るきっかけを提供するための試行的な実践であり、生徒の実践における感想等から、この実践の有効性が示唆されたと考えられた。また、本実践を参観した教員からは、「余暇指導として何を指導するか、よくわかっていない」などの感想のほかに、今後の余暇指導の授業に向けた視点を得たとの反応が得られ、今後の指導の有用性についても示唆されたと考えられた。今後の移行支援の観点から展開する余暇指導の検討の必要性が示唆されたと言える。

あくまでも本実践は2時間という試行的な実践である。生徒においては、余暇について考えるきっかけを与えた実践に過ぎないであろう。学校卒業後も授業内容を活用しながら生活をしていくには、余暇指導内容をより明確化し、多くの時間で単元を構成し、実践を行う必要があるだろう。

また、障害の程度や生活経験の有無によって個々人の余暇についての指導の方針は異なる。実際に一般就労をしている生徒へのインタビュー調査など、職業生活との結びつきを考えた余暇に関する研究をさらに進め、特別支援教育における移行支援の実践として還元していくことが求められる。

謝辞

本実践を実施するにあたってご協力いただいたA特別支援学校の先生方、生徒の皆様に深く感謝を申し上げます。

付記

本研究は、日本職業リハビリテーション学会 令和5年度研究スタートアップ助成事業「知的障害者の職業生活の指導支援に関する研究」(研究代表者：山田有輝也)の助成を受けた。

文 献

国立特別支援教育総合研究所 (2012) : 特別支援学校高等部(専攻科)における進路指導・職業教育支援プログラムの開発 研究成果報告書. 国立特別支援教育総合研究所

Maebara, K. (2022) Case study on the employment of person with intellectual disability in childcare

work in Japan. Journal of Intellectual Disability-Diagnosis and Treatment, 10(3), 122-129

松為信雄. (2006). キャリア教育の課題. 松為信雄・菊池恵美子(編集)「職業リハビリテーション学 改訂第2版. 協同医書出版社. pp.40-43.

松為信雄. (2020) 職業準備性(職業レディネス). 日本職業リハビリテーション学会(監修)「職業リハビリテーション用語集」. やどかり出版. pp.18-19

文部科学省(2018) 特別支援学校学習指導要領総則編, 開隆堂.

文部科学省(2021a) 特別支援教育資料. 文部科学省. <[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1406456\\_00009.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1406456_00009.htm)>, (2024年1月6日参照).

文部科学省(2021b) 障害のある子供の教育支援の手引き～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～. 文部科学省. <[https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt\\_tokubetu01-000016487\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt_tokubetu01-000016487_02.pdf)>, (2024年1月6日参照).

村上穂高(2021) 知的障害生徒の余暇の充実に向けた授業-楽しさの共有を通して-. 京都教育大学総合教育臨床センター特別支援教育臨床実践拠点年報, 2, 41-51.

根本真理子(2018) 定着支援. 日本職業リハビリテーション学会(編) 障害者・就労支援のキーワード職業リハビリテーション用語集. 134-135. やどかり出版

Szymanski,E.M. (1994) Transition:Life-Span and Life-Space Consideration for Empowerment. Exceptional Children, 60(5), 402-410

Tooman,M.L., Grant Revell Jr,W. & Melia,R.P. (1988) The role of rehabilitation counselor in the provision of transition and supported employment programs. Rubin,S.E. & Rubin,N.M. (Ed.) Contemporary Challenges to the Rehabilitation Counseling Profession. Paul.H.BROOKES Publishing CO.Baltimore Maryland

Trach,J.S., Oertle,K.M. & Plotner,A.J. (2014) Transition from School through process

to outcomes. Strauser, D.R. (Ed.) Career Development, Employment and Disability in Rehabilitation From Theory to practice. Springer Publishing Company, LCC New York.

内海 淳 (2004) : 新たな進路指導・「移行支援」への転換. 松矢勝宏 (監修) 「主体性を支える個別の移行支援」大揚社, 9-28.

八重田淳・柴田珠里・梅永雄二 (2000) 学校から職場への移行－リハビリテーションサービス連携の鍵. 職業リハビリテーション, 13, 32-39.

山田有輝也・前原和明 (2023) 知的障害者の余暇に関する文献レビュー：実践研究に焦点を当てて. 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門, 78, 97-103.

安田智恵・丸山啓史 (2021) 知的障害者の余暇に関わる学校の役割：知的障害者とその家族へのインタビュー調査から. 京都教育大学 総合教育臨床センター特別支援教育臨床実践拠点年報, 2, 12-22.

吉田昌義・藤田 誠・関口トシ子 (2008) : 特別支援教育 (知的障害・自閉症) における進路指導・支援－担任のためのガイド－. ジアース教育新社.

### Summary

While support and education related to leisure education are provided in special needs schools, there

is insufficient emphasis on leisure education focusing on the transition to work life after graduation. In this study, we implemented a practice that focuses on the importance of leisure time to students with intellectual disabilities in a special needs school who are transitioning to employment. The class practice consisted of activities in which students reflected on their current leisure activities and considered the “importance of leisure time” and “necessary skills for engaging in leisure activities.” The students' reflections after the class included sentiments such as, “I want to enjoy my leisure time and relax my mind so that it does not negatively impact my daily work” and “Once I start working, I will strive to balance work and leisure time in my life.” We aim to conduct further research and introduce practical interventions to support leisure time as students transition to work life after school.

**Key Words** : working life, special needs schools, intellectual disabilities, leisure, competitive employment

(Received January 10, 2024)